

高校生とともに学び、  
つくりだす地域

## 地域社会に関わる高校生は増える!?

### ■そのまちで暮らす最後になる高校時代

人生の中で、そのまちで暮らす最後になるかもしれない高校生。

地域社会の中の高校生の存在や、地域社会の中で高校生が成長することは、地域づくりやコミュニティ政策にどのような意味をもつのだろうか。今号から4回にわたり、高校生の地域社会参加やボランティア参加が地域づくりにどのような影響をもたらしているのか。いくつかの事例をもとに考えていきたい。今号は、高校生の地域参加をめぐる政策面や高校生の意識について概括する。

### ■地域づくりは課題解決ではない

高校生と地域づくりを考える際にもっとも大事な視点は、「地域づくりのため」の高校生ではないということだ。サービスラーニングという理論(図1)があるが、(1)活動している本人(高校生)にとって学びがあり、(2)地域にとって学びがある。こうした相互関係が第一に重要であり、(3)関係性が育つことで高校生が地域に関わりやすくなる場や仕組み自体が生まれて整っていくことが重視される。本稿の大きなテーマに含まれる「高校生が学び、つくりだす」が成立する3要件と言っている。今後、紹介する事例もこうした3つの観点を含むものだ。



石井 大一郎

(国立大学法人宇都宮大学)  
地域デザイン科学部 教授

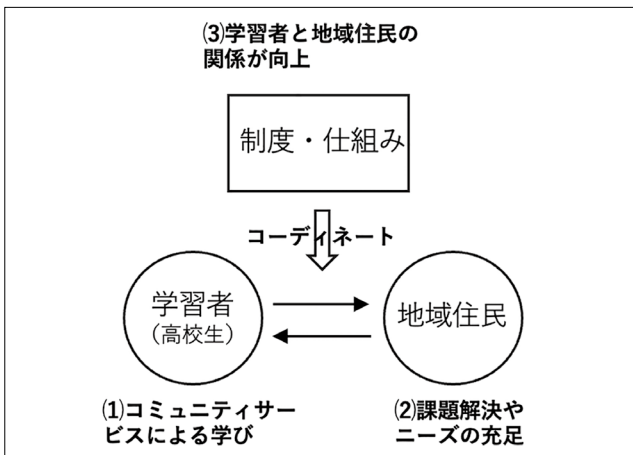


図1：サービスラーニングの概念図(筆者作成)

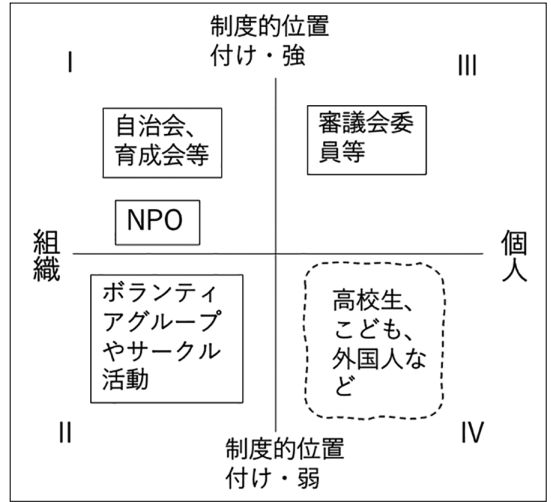


図2：参加のしやすさの類型(筆者作成)

大学での教育研究の傍ら、栃木県や福島県、神奈川県で数多く地域づくりに関わってきた筆者は、地域づくりは「課題解決よりも主体形成」と述べている。これは、課題解決を急ぐあまり、対話の場を軽視したり、形ばかりの活動やイベントとなってしまう、固定化されたメンバーやアイデアが生まれにくい状況を数多くみてきた反省から生まれた言葉である。誤解を恐れずに言えば、課題は解決できなくても良いから、身近な地域で、対話や議論できる仲間を一人、また一人と増やしていくことが大切なのだ、ということである。つまり、参加の機会や場が多彩にあって、誰もが想いをつぶやく



写真1：月に1度、高校生～お年寄りまでが集まり自分たちのやりたいことを発表したり、聴き合う「100人の一歩会議」、栃木県真岡市

やってみたいことがあれば始められる環境があることが、持続可能な地域づくりに必要なのである。

本稿で議論を進める際に、特に意識していることが、これまででそうした参加の機会や場を持ちにくかった図2のIVの人たちとつながり、想いをつぶやくことのできる地域社会づくりである(写真1)。高校生その他に、外国人、そして、ケアが必要な人たち。さらには意思決定への参加という観点では女性も含まれよう(参考…全国の自

治会長の女性比率は2023年4月時点で7.8%)。

### ■「高校生×地域づくり」

さて、ここで「高校生×地域づくり」を語るにあたって、高校生と縁遠いかもしいない地域づくりのキーパーソンの方たちや自治体地域振興関係の担当者の方たちと、はじめに共有したいことがある。筆者の気になる、以下の高校生に関係する政策および高校生の意識調査の結果である。高校生が地域社会と身近なところにいるという前提に立つための前情報をインプットしてみよう。

- (1) 文部科学省による高校の教育課程におけるボランティア活動等への参加の促進
- (2) 市町村による高校生・若者の地域社会参加の支援施策の増加
- (3) 高校生の地域社会参加・ボランティア参加への高い意識

### ■「高校の『総合的な探究の時間』と地域社会のマッチング」

まず(1)について現状を把握する。2018年以降、高校の総合的な探究の時



写真2：自治体と地域の大人たちとともに「総合的な探究の時間」に取り組む日光市内の高校

間などの学校の教育課程を通した社会参加、地域参加が全国的に進められつつあるということである。新しい学習指導要領にもとづいて教育課程を実施するすべての高校が濃淡はあるものの推進している。高校生は、社会や実生活をもとにテーマを見つけることとされ、地域の空き家や子どもの貧困など、実際の地域社会の課題やニーズと結び付け、自治体や地元の町会、自治会等と連携して取り組んでいる例も少なくない(写真2)。高校の教員は通常業務が忙しいこともあり、現実の地域社会とマッチングすることは簡単ではなく、地域の方々の出番でありコーディネーター的な役割が必要となる。というわけで高校側は地域社

会との接点を求めているのである。各高校には「地域連携教員」が配置されている。ちなみに総合的な探究の時間で求められている学習内容は以下の通りである。

- ① 課題や問いを立て、その解決のために必要となる知識及びスキルを身に付けること
- ② 自分のテーマに対する行動軸やアクションプランをつくること
- ③ 社会や実生活など、身近なところから自分のテーマを見つけること
- ④ テーマに対して、情報を収集し、整理・分析しながら、自らの考えをまとめ・表現・発信できるようにすること
- ⑤ 他者と協力しながら、新たな価値をつくりだすこと

(文部科学省中央教育審議会 2018年7月告示)

■高校生とつながり始めたまちづくり  
政策・施策

次に(2)について確認する。筆者は2016年に神奈川県から栃木県に移住した。地方で自治体の方々と共に研究等の仕事をするが増えた。その中で最も多く取り組んでいるものが高校生や若者の地域

社会への参加・参画に関わるものである。高校の総合的な探究の時間の実施支援、移住定住(高校卒業後も帰ってきやすいまちづくりなど)、中心市街地活性化(まちなかの高校生の居場所づくりなど)、このほかに高校生による政策提言する機会を設ける自治体もある。地方では若者の流出が人口減少の最たるものとなっている。流出そのものは防げなくても、高校時代に過ごしたまちや地域での思い出、そしてそこで接した大人たちとの経験は、高校生自らの育ちにプラスの影響を及ぼすであろうと同時に、将来の関係人口形成にもつながるだろう。まち・むらの未来に向けて、高校生と地域と自治体とともに事業や施策に取り組むことは、高校生のためだけでなく、地域のためだけでもない、それぞれの持ち味を生かし合うコミュニケーションの技術を高め、新たな地域づくりの推進力となっていくはずだ。

■地域社会に関わる高校生は増える!?

最後に(3)の高校生の地域参加についての実態と意識を確認してみよう。筆者が栃木県総合教育センターと共同で行った県内すべての県立高校の各校2クラスに調査した

ものがある(回答者数n2692、回答率96・3%)。まず高校が行う教育課程以外で、ボランティアや地域活動活動に参加したことのある人は、回答のあった2692人のうち719人(26・7%)、また経験がない人は1948人(72・4%)、無回答が25人(0・9%)であった。4人に1人以上は経験をしているのだ。そして経験をしていない人でも、取り組み障壁がなければ活動に取り組みたいかを尋ねた結果、「思う」「少し思う」と回答した人の合計は、定時制高校や特別支援学校を除けば7割程度(全日制・普通・総合73・1%、全日制・職業系専門66・1%)となっている。本調査がコロナ前の2019年であり、先に示した多くの高校で取り組み始めた総合の探究の時間が普及する以前の時点であることを考えれば、現在は活動経験や活動に取り組みたい人の割合も高くなっていることが予想される。今後、高校生と接点をもつ機会が地域社会において増えるはずである。私たちは準備できているだろうか。

### ■地域の未来を作る高校生から学ぶ

時代は変わった。これまで地域づくりに関わりを持つことができなかった人たちの

つばやきを受けとめ、つばやきから学び、まち・むらの新しい力に変えていくにはありませんか。そうした人の代表選手として、高校生がいます。上述したように国や基礎自治体の政策はもとより、地域社会に関わろうとする高校生の意識も高まりつつある。必要なことは高校生を受け止める地域社会の私たち大人の対話的で協働的な姿勢であり、経験であろう。それは決して、高校生を教える、支援するという関わりではなく、地域の未来を作る高校生から気づきを得よう、学ぼうとする関わりであり、一緒に、「二人ひとりのその地域でありたい暮らし」を聴き合うところから始まるのであろう。次号ではこうした取り組みを実践する栃木県真岡市の事例を紹介しつつ、高校生の居場所づくりや活動への参加のコーディネートについて議論する。

難しいし、なかなかないからすごくいいことだなんて思いました。(高校生Bさん)上の年代の方から、それいいね、それわかりやすいねとか結構もらえたりするので自信につながっているのかなって。

(高校生Cさん)自分の意思で自分はどうしたいって思って、それをできたりすると、あ、すごいなんかやってよかったとか、なんでしよう。すごい意欲が高まるというか自分に自信がきます。

それぞれの言葉には、高校生に限らず、これまで地域とつながりのなかった人たちの「新たな参加」を生み出すヒントが含まれているだろう。主体性を生み出すきっかけや自己有用感を得る機会、日常では得られにくい他者とのコミュニケーション力の向上など、これまでの地域づくりでは注目されにくかった要素があり、高校生の地域社会参加から学ぶことが多くあることがわかる。

最後に私が関わっている栃木県真岡市の「まちをつくろう」プロジェクトに参加した高校生からの、参加した感想メッセージをいくつか見てみよう(注1)。地域に関わることの喜びや私たち大人がすべきことを感じることができ。

(高校生Aさん)自分の意見を言う、多くの大人の人の前とかで、言うのってすごい成果の一部である。

(注1)本メッセージは、筆者らが栃木県真岡市との共同研究において実施した研究の(石川すず卒業研究「地域活動に非積極的な高校生・大学生の課外活動による意識変容」シティズンシップ醸成を目指して)成果の一部である。